

愛すべき  
ERIAローカル職員

山田公士

私は二〇〇八年六月から約二年間、インドネシアのジャカルタで設立間もない東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）の財務課長として働く機会を得た。今回は、この場をお借りし、このときの経験、特にERIAのローカル職員との仕事を通じて私なりに感じたインドネシア人の気質や物の考え方、また、彼らとの接し方や印象に残った習慣などを述べて頂くこととする。

ERIAの職員数も立ち上げ当時は西村事務総長を含めわずか五名であり、全員日本人であった。そのERIAもローカル職員や研究者などを少しずつ採用していき、今や四〇名を超えるまでになり、その約半数をインドネシア人であるローカル職員が占めることとなった。私の担当である財務・経理部門も私以外は五名全てがローカル職員であり、彼らとのコミュニケーションをうまく取らなると、当然業務にも支障を来すこととなる。特に、彼らは全員ムスリムだったので（他の部署にはキリスト教徒もいたが、財務・経理部門の職員はたまたま全員ムスリムだった）、一日の内で数回は、お祈りの時間になると事務所内にあるムシヨラと呼ばれる礼拝室に行くことになり、そのたびに業



ERIAローカル・スタッフの結婚式にて（中央が筆者）。

務が中断されることになった。特に、金曜日ともなると男性のムスリムはモスクで礼拝することになっており、金曜日は通常よりも長めにお昼休みを取らせる様配慮する必要がある。この点、私の部下五名の内三名が男性であったため、実に課員の半数以上は金曜のお昼前後二時間位は席を外さざるを得ないことになり、その時間帯は、たとえば急な仕事が入ってきたり、彼らに仕事を振ることができなかつた。さらに、これがラマダンとなると約一カ月間、日中は断食することとなり、やはりいくら彼らにとっては毎年のことで慣れているとは言っても、少し仕事の効率やペースが落ちているのではないかと思うことがある一方で、空腹である彼らに対しこちらが気を遣わざるを得ないこともあった。こういった様々なことを念頭において、日々の業務を進める必要があった。

ただ、一方で、彼らは非常にやさしい一面もあり、私が残業などしていると、たまにケンタッキー・フライド・チキンやマクドナルド・ハンバーガーなどを差し入れてくれた。もちろん、私の方も時々々馳走してあげていたので、そのお礼という意味もある

のかもしれないが、ささやかながら幸福感に浸ることができた。また、私の帰国が迫った頃、バンドンに行つてみたいと言つと、綿密にスケジュールを考え、行きは電

車、帰りは車での日帰り旅行に付き合ってくれ、さらに歌好きの私のためにカラオケ・ボックスなどにも誘ってくれた。ちなみに、インドネシア人はなぜか五輪真弓の「心の友」が好きである。私たち日本人は五輪真弓という「恋人よ」を思い出す、彼らにとっては日本語の歌という五輪真弓の「心の友」である。彼らは日本人なら誰でも「心の友」を知っていると錯覚しており、こちらが知らないと言つとなぜあれ程有名な歌を知らないのかと不思議に思われてしまった。私はこの歌は実は日本でも非常にポピュラーな歌で単に私が知らなかつただけではないかと不安になり、周りの日本人に確認してみたが、やはり他の日本人も余りこの歌を知らないということが分かり安心したものである。いずれにしても、インドネシア人はよく親日的と言われるが、私が接したインドネシア人もその例外ではなかつた。

インドネシアの習慣で面白いと思つたのは、誕生日にお祝いしてもらふべき本人が職場の方々にケーキやお菓子を配るといふことである。これはもしかしたらERIAのローカル職員だけの習慣だったのかもしれないが、いずれにしても、はじめは本人がケーキをご馳走すると聞いたときは冗談だと思つたのだが、実際にケーキをご馳走になったときには少々驚いた。もちろんご馳走になるだけではなく、私も自分の誕生日には、ケーキを職場の方々全員に行き渡るように購入した。職員数も業務委託で派遣されている受付や清掃の職員も含めると五〇人近くに達するためその人数分だけ用意しなければならず、日本円で一万円位の出費になってしまった。でも、毎月誰かの誕生日があるの、そのたびにおいしいケーキを頂くことができたので、ラッキーだったかもしれない。

また、何度か結婚式にも招待して頂いたが、その内の一度は、女性課員の出身地であるスマトラ



ERIAローカルスタッフとともに。



のバダンで結婚式を挙げるということで、現地まで赴いた。披露宴はホテルなどではなく女性課員の余り広くはない実家で行われた。それは質素で慎ましいものではあったが、新婦の装飾鮮やかな民族衣装は素晴らしかった。ただ、残念なことにその数カ月後にスマトラ島沖でM七・六の地震が発生し、バダンを中心に多くの犠牲者が出てしまった。結婚式を挙げた女性課員に加えもう一人、男性課員もバダン出身ということで心配したのだが、幸い実家の家屋に多少の被害は出たものの、家族は無事であった。

なお、私が仕事を共にしたインドネシア人に関して言えば、彼らはあまり自己主張せず、どちらかという与他人(特に上司)の顔色を伺いながら、仕事を進めるところがあった。それはたまたま私が日本人であり業務遂行上も明確な上下関係が存在していたからであって、インドネシア人同士では多少違うのかもしれないが、少なくとも日本人である私に対してはそうであった。別の表現をすれば、彼らは協調性を重んじるものの、一方で上司に対する依存心が強いのではないかと私には感じられることも多かったが、仕事は行い易かったと言える。

何はともあれ、私にとって、ERIAとともに汗を流したインドネシア人スタッフは非常に愛すべき存在であり、帰国した今でも心の支えとなっている。